

Jan A. Aertsen
*Medieval Philosophy and the Transcendentals,
The Case of Thomas Aquinas*

Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters

ix+468 Brill

渡部 菊郎

著者は1938年9月7日アムステルダム生まれ、ケルン大学の哲学科教授で、トマス研究所の所長を勤められている。国際中世哲学会の副委員長であり、中世関係の主要雑誌の編集長や編集顧問なども勤められている。現在中世哲学研究における世界的に主導的な立場にあり、昨年のエルフルトの国際中世哲学会でも、主要パネラーの一人であられた。業績は、拙宅に届いたFaxによると、トマス（以下、T. と略記）およびその周辺を中心として85にわたる著作、論文、事典項目執筆、多数の書評などがあり、著者の研究領域の及ぶところ全ては紙数の関係からここでご紹介することはできない。博士論文は *Natura en Creatura De denkweg van Thomas van Aquino*, Free University, 1982 であり、後 *Nature and Creature Thomas Aquinas's Way of Thought* として同じシリーズで Brill から、1988年に出版されている（「中世哲学研究」第10号に浦英雄氏による書評がある）。

本書において著者は、中世における「哲学」は超越論的と呼ばれる思考方法であった、というテーゼを立てる。それは、中世において哲学とは何であるかという問いに対する答えとなっている。序論では中世哲学は存在したかということをめぐる3つの立場を検討する。i「キリスト教哲学」(E. Gilson)「Exodos- 形而上学」において神と存在（ギリシア哲学の善に代わって）の一致が見られた。しかし、中世において偽ディオニュシウスの果たした役割は大きいし、またジルソンはT. の「哲学の固有な秩序」を見落としていないか、ii「言語論的展開」論理学と意味論を中心とする。*The Cambridge History of Later Medieval Philosophy* 等に代表される研究動向である。しかし、現代哲学の問題からの一面的なものが多い。iii、アリストテレスのエチカを中心に、知性的な哲学的「生き方」の成立を見る立場。代表者とも言えるアラン・ド・リベラ教授は1277年の断罪を大きく見過ぎていないか、また、エックハ

ルトは倫理的アリストテレス主義に向かっていたといえるのか、それゆえ、中世的な思考経験はもっと普遍的で原理的な方法から主題化されねばならない。著者は中世の哲学は超越論的思考とみなせると主張する。アルベルトゥスがすでに「第一哲学」は *prima transcendentia* を扱うとしている。そして、超越論的思考として中世哲学を理解してゆくとのさまざまな問題が具体的に明らかになるという。しかし、超越論的トミズムのようなカント的立場をとるのではないことは強調している。

本書の特徴は、T. を中心とした「超越概念」のテキスト（主要テキストは、*In I Sententiarum* 8. 1. 3, 真理論 1・1, 真理論 21. 1）に即し、T. の影響を受けた著作やその T. による解釈を広範囲にわたって、いわば T. のなしたコメントリーののように T. のテキストに即して詳細に展開してゆくところにある。第一章は超越概念の説の開始と題され、初めて超越概念の説を定式化した総長フィリップの *Summa de bono*（善を中心として書かれた中世最初のスツマである）を取り上げ、当時のマニ教主義であるカタリ派の 2 元論に対して *communissima prima* としての *ens, unum, verum, bonum* を取り上げ検討する。彼の意図は思考の根拠へ遡行することであり、超越概念が全ての思考されうる実在を含むのである。次にアレクサンダー・ハレンシスに帰される *Summa theologica* を考察し、超越概念の説が初めて神学的総合にもたらされ、神の属性の反省にとつての形而上学的な根拠を提供するようになることを示す。また、大アルベルトゥスにとって、善の概念は「在るもの」の後の概念である。在るものが知性の最初の概念であり、知性の還元が目指すものである。神学者の意図は全てのものの原因であると語られる限りでの在るものを扱うことである。善は在るものにいかなる実在性も与えない。それは真にも一にも当てはまり、*modus significandi* の違いなのである。以上中世哲学における「超越概念」の体系的展開を示す。第二章では T. の超越概念に関する一般的な叙述をし、T. の思想において超越概念が基礎的なものであることを示す。T. によれば、学知には根原と終局があるが、その最初のものは還元によってはえられないのであり、学知においても定義においてもその第一のものへの還元がある。これは、アヴィケンナの形而上学註解から影響を受けている。アヴィケンナは第一の概念は「もの」「在るもの」「必然的なもの」であり、後には、「もの」「在るもの」「一」とされる。しかし T. の解釈は「在るもの」の優位性にあり、アヴィケンナは *impressio*、T. は *conceptio* と捉えるが、アヴィケンナは第一の概念は宇宙的な能動知性からの直接の流出であり、T. の *conceptio*

は、第一の概念の形成における人間知性自身の活動性を表している。在るものへの附加は、純粹に概念的なものであり、様相的な解明である。カテゴリーが在るものの特種な様態の解明であるのに対し、超越概念は在るものの一般的・普遍的な解明である。全てのカテゴリーに伴うからカテゴリーを超えているという点が重要である。そこで、*modus significandi* に注目し、*communissima* の必然性を説いていることが先行者と違うところであるとする。彼の方法はわれわれの概念の最初の概念への還元である。カントと違い、超越概念は認識の秩序の *prima* であり、理性的知の基礎なのである。「真」「善」を挙げるのは人間の認識・欲求能力における超越論的閉性による。第3章では、形而上学と超越概念の関係を分析し、13世紀のアリストテレスとアラビアの哲学によるその註解の受容の特徴を見る。アリストテレスは形而上学の対象を神学と呼んだ。しかし『ポエティウスの三量一体論註解』によれば、キリスト教神学と区別された、哲学的な神学ないし、形而上学、第一哲学の対象は在るものとしての在るものである。形而上学註解の序文などの検討からこれが超越概念の説の基礎を成したという。彼の第一哲学の理解は超越論的なのである。T. の方法論は還元による、最初に知られたものの反省的な理解という構造を持っている。そして、形而上学第4巻の註解の重要性を示す。形而上学の学的構造の分析が超越概念の説と関係し、超越概念は、形而上学と内的な関連を持つ。形而上学の主題についてのT. の理解では、形而上学のうちで神が原因として捉えられている。そして、人間知性の還元的観点からの論証の第一原理の超越論的な基礎づけという観点での形而上学と還元の方法の連関を提示する。第4章以下ではまず、第一の超越概念としての「在るもの *ens*」が取り上げられる。原因性における第一と共通性における第一の区別をし、共通性における第一のものは全てのものの認識において把捉される。この世では、*ens commune* は知られるが、非被造的なものは知られない。T. の立場は最初の可知的なものは *simpliciter* に最初なもの、つまり神的存在ではなく、「われわれにとって」第一の、超越論的在るものなのである。これは彼の形而上学理解とも関係する。彼の超越概念の説は反プラトニズムであり、在るものの優位性はそれが現実態性に基づいているから存在論的基礎を持つ。そして在るものの知を扱うスコトゥスとの対比（明らかに Honnefelder 教授を意識している）をする。在るものとしての在るものの能動知性の光のもとにおける把捉と、アヴェロエスから借用した、能動知性の「器官」であるという第一の概念の把握。これは、超越論的トミズムの言うような思考の *a priori* な形式的条件などで

はない。esse (第一の現実性) と ens (被造的現実性) の区別をし、「在るもの」と「もの」との関係の T. の論はアヴィケンナの批判にとって本質的なものであり、認識論的また存在論的な T. の超越論的思考方法は密接に連結しているとする。在るものは現実態にある限りにおいて可知的である。アリストテレスの在るものと一との置換性に対しては、T. の置換性は分割の否定のみによることを示す。第5章では超越概念としての「一」を扱う。古典の伝統では、「一」は、最初の数ではなく、数の原理であるとされていた。T. はアヴィケンナを批判して「一」を、超越論的な一と対比して、それが述語されるものに対してレアルな何かを加える。数学的な一は尺度の存在を意味表示している。一概念は、「多数」概念に依存してはいないがそれに先立っている。欠如として理解されているのは一ではなく、多数であるという。第6章では超越概念としての「真」を扱う。知の対象は真であり、欲求の対象が善である。T. はアリストテレスにしたがって、真の場はものではなく、魂の中にあるとした。在るものと真との関係は在るものの二つの様相の区別に基づく。真は第2の様相、精神の中のあるものに属する。これはアウグスティヌスの在るものは真という仕方とは違い、在るものを在るということが真であるということである。(adaequatio は中世全般においてではなく T. にとっての第一の主要な定義である。) 知性のものへの関係は知識は類同化の過程だから知性のはたらきによって完成される。知る過程の目的・終局が真なのであり、知性のうちにあり、知性によって実現される。T. の超越概念の新しいところは anima と在るものとの関係を導入したことである。魂が超越論的に開かれていることが在るものとしての在るものの学知である形而上学の可能性に対する条件である。ens verum bonum の関係は、anima intellectus voluntas に対応する。T. は真と現実態の密接な関係を見ているのであり、真は在るものに付随する。第一の超越概念ではない。在るものは存在の現実態に基づいて知られ得るものである。ものの真理の尺度は実践的な知性であり、adaequatio の終局は神の知性へのものの一致である。真の「関係的」超越論性を示す。補遺として、Giambattista Vico (1668-1744) の verum と factum の置換性のテーゼの考究を挙げ、真と偽の議論を検討している。第7章で超越概念としての善が問題とされる。在るものは在るものである限り善である点からプラトンの超・在るものとしての善に反論する。善はすべてのカテゴリーにおいて見出される。13世紀におけるアリストテレスのアナロギアの議論の変更は明らかであり、中世の善の超越性のテーゼは、アリストテレスによ

るプラトンのアイデア批判とアウグスティヌスのマニ教批判から着想を得ているのである。それは神の創造の善性の表現でもある。在るものは欲求されうる、欲求の存在の完成をもたらす限りにおいて善なのである。(人間のはたらしにおける実践的知性の第一原理としての善の問題に対する目配りも忘れられてはいない)。第8章は、美：忘れられた超越概念?と題されている。近年この観点を強調する研究があるが、美は善に認識力の関係を付け加えているだけであり、T. はディオニュシウスに従い善との関連で美を見ている。美は第一の超越概念である在るものとの関係で規定されていない。それゆえ超越論的に特別な位置を見出す試みは失敗する。真の善への広がりT. における美の位置を最もよく示す。これは中世において、善に先立つ超越概念である真の方向への展開を示すのである。第9章で超越概念と神との関係が問題とされ、神は在るもの、一、真、そして善性である。maxime communia と神の関係は原因的な関係とみなされている。神の名前としての在るもの、一性、真理、善性が扱われる。『神名論』との関係で、概念の複数性の必然性は人間知性が、ひとつの概念で神の完全性を的確に捉えられないことによる。『三位一体論』についても超越概念という観点から分析を加える。第10章が結論となっている。アリストテレスに由来するとしても超越概念の体系化は13世紀のオリジナルなものである。超越概念の説の源泉として、アリストテレス、アヴィケンナ、ボエティウス、偽ディオニュシウスがあることをもう一度確認し、説の体系的なまとめをし、T. の思想にとっての重要性を見る。こうして中世哲学が超越論的な思考方法であると解釈しうることを確認する。

主要部分はT. の「超越論的思考方法」のテキストに即した地道な研究であるが、序文と結論を見ると、その地道な研究が現在の欧米における中世哲学研究の現状に対する広い知見と批判にあることがはっきりする。T. の一部のテキストからの一面的な解釈や、現代哲学的観点からの解釈などを快刀乱麻のように切り捨てながら自説を主張するところなど、著者のテキスト研究に基づいた自信と意気込み(お立場からか?)が感じられる。

これからは、これまでの研究をさらに、エックハルトにまで広げてゆく予定とのことである。